

科学をめぐるコミュニケーション政策の構造災的課題

——先端生命科学を巡る事例から——

○成城大学 標葉隆馬

1 目的

本研究では、幹細胞・再生医療研究を事例に、研究者と一般回答者の間のコミュニケーションに対する意識の差異を浮き彫りにすることで、科学コミュニケーション活動が持つ関心と政策的背景の課題を検討する。

2 背景と方法

幹細胞・再生医療は、ヒト iPS 細胞の樹立を始めとして、近年わが国発の様々なブレークスルーが登場している。またより最近では、ヒト iPS 細胞を用いた臨床試験がスタートするなど、幹細胞・再生医療分野は重点領域としての存在感と共に、その注目度をますます高めつつある。しかしながら、幹細胞・再生医療研究においてもコミュニケーション活動の推進が議論されてきた一方で、コミュニケーション活動を巡る構造的課題の把握は進んでいない。幹細胞・再生医療研究のような倫理的・法的・社会的課題 (Ethical, Legal, and Social Issues: ELSIs) の議論を囿らずも含むこととなる萌芽的な科学技術領域のコミュニケーションでは、なおさらこのような問題に敏感である必要があるだろう。またこれまでのコミュニケーション活動と同様に繰り返される構造的な問題は隠れてはいなかっただろうか。

このような背景から、本調査では、一般の人々2161名の回答と研究者1115名の回答を得て、それぞれの関心事を明らかにすると共に、両者の間の関心と意識の差異について検討した。その結果から、活動面、また政策面までも含めた、これまでの科学コミュニケーション活動をめぐる課題について検討を加える。

3 結果

分析の結果、一般の人々の「知りたい事柄」と研究者の「伝えたい事柄」の間とに差異が存在する。研究者は、科学的妥当性や再生医療のメカニズム、またその必要性などを重視しており、また伝えたいと考える傾向にある。その一方で、一般の人々の関心事は、科学的内実よりも、むしろ再生医療が実現した際の事柄への関心 (ベネフィットは勿論だが、それ以上に生じうるリスクや、問題発生時の対応、責任体制、実際にかかる費用等) にあることが見出された。また倫理的課題についての関心の置き所の差異も明らかとなった。このような差異が放置されたままのコミュニケーションとその政策的方向性が持つ課題は大きいと言わざるを得ない。